

---

## 【03】 March

玲(れい)

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

【03】 March

### 【コード】

N7188Z

### 【作者名】

玲れい

### 【あらすじ】

佐々木七海ささきななみと岡崎健助おかさきけんすけの物語。

## プロローグ 疫病、感染、そして

雪が溶けた。が、暖かというにはまだ少し足りない風が頬をかすめる。

七海ななみが入院してすでに1年。

どの医者もさじを投げた彼女の病は感染率の高いものだった。

秋ごろからの頭痛から始まり、微熱や嘔吐が続いた。

近場の病院で診察を繰り返し、薬は増えては減ったりした。

そして11月の末に、原因不明のウイルスに感染していることが分かった。

分かった途端、紹介状を書くから大きな病院へ行つたほうが良いと言われ。

そんなはずはない、ここだって入院設備は整っているし、その病院へ通うには往復何時間もかかる。

食い下がった彼に対して、その医師、谷崎といったか、彼は突然、うちじゃ手におえるケースじゃないし、他にも重症患者はいるんだ！と取り乱した。

そこまで言われて、疫病だから見たくないのだと理解した。

看護師やほかの患者にうつりでもして訴えられたら、たまつたもんじゃない。

手に取るように考えが分かったのは自分も医者の端くれだからなのかもしれない。

2人でいろいろ考えて、国立病院の近くに引っ越すことにした。

七海も彼も両親はすでに他界してしまっており、親戚づきあいも浅い。

その間にも、病は彼女を蝕んでいく。最近、腕にあざができた。

とりあえず近所の奥様方と仲の良い知人たちに、引越す事と新居の住所を伝えた。

彼は反対したが、彼女が

「友達には理由も知っておいてほしいの。突然、なんてことも考えられるでしょ？」

と言ったため、一部の友人には理由も話した。

彼の友達は察しがいいというか、細やかな気遣いをしてくれたが、彼女の友達にはこんな文面を送ってきた者もいた。

治るといいね、応援してる。

ウソつけ。何が治るといいねだ。こういう同情や憐みが一番困る。どうせ、へー。かわいそう。ぐらいにしか思っていないくせに。

疫病？なにそれうつるの？なんて送ってきたやつには返信しなかった。

返信しないでいいと彼が怒った。

七海も七海だ。こんなやつらに送る必要はない。

それでも、サークルでお世話になったもの。二次会もよく誘ってもらったし。

と、困ったように笑う彼女を見て、それ以上は何も言えなかった。

彼女は、切り捨てられることが多かったが、自分からは決して切らなかつた。そういう性格なのだろう。

けれど、実質、その言葉をかけてきた輩は1人も見舞いにすら来なかつた。

【健助<sup>けんすけ</sup>さん、七海ちゃんの具合どう？本人には聞き辛くて…。もし、なにか異変があったらすぐにでも教えてね^^;】

互いの共通の友人から、こんなメールが届いたこともあった。

けど、あくまで具合を聞いているわけで、都合ではない。

見舞いに来る気もないということが丸わかりで、虚しくなった。  
むしろ、彼女は七海に異変があったら一体どうしてくれるのだろう。  
すぐにでもかけつけてくれるのだろうか、彼女の家はこの病院から  
タクシーで2時間はかかる。

それとも七海に寄り添って泣くのだろうか。七海、七海、と名を呼ぶ  
ぶのだろうか。

「……七海」

僕の前には髪を切った七海がいる。昨日、僕が切った。  
感染してしまうかもしれないから、美容院のお気に入りの店員さん  
はよばかった。

「……」

「ごめんな、あんまりうまく切れなくて」

「……」

声が出づらくなって、今はもう、話すことすらかなわない。  
話すときは筆談。手話は、彼女がひどく嫌がったから習わなかった。  
そんなことないよ。ありがとう。

筋肉が落ちてきたか細い腕で、スケッチブックに、丁寧に書く。

「君が気に入ってくれたのなら、僕はそれで」

七海はショートも似合うね。

そういつて髪を漉いたら、笑ってくれた。この笑顔がいつまでも見  
ればいいのと思う。

あざが、足にも広がってきていた。

桜が咲いた。病院には大きな桜の木があったから、人が少ない時間  
帯を選んでお花見をしに行った。

車いすを僕がおす。七海は申し訳なさそうに見ていたけど、僕が笑  
うと微笑んだ。

「きれいだね」

桜が木の葉のように、くるくると、舞って、舞って、踊る。  
鮮やかなピンク色が風と共に。

「来年もさ」

「この桜、見ような」

「一緒に、いような」

「……」

七海は何も言わなかった。言えなかったのかもしれないけど、身動きすらしなかった。

僕も何も言わなかった。

「風邪ひいちゃうかもしれないし、そろそろ戻ろっか」  
こくん、と黒髪が揺れる。

彼女が僕と桜を見たのは、これが最後だった。

**ブローグ 疫病、感染、そして（後書き）**

最初から暗くてごめんなさい。

何話になるかめどが立ちません

誤字／脱字あったら報告お願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7188z/>

---

【03】 March

2011年12月23日23時56分発行